外国人留学生の文語文法・古語学習について考える(4)
―格助詞・接続助詞の場合―

深　澤　　愛

1．はじめに

筆者はこれまで、深澤（2013）（2014a）（2014b）において、外国人留学生が文語助動詞、文語動詞（敬語動詞を除く）、文語形容詞を学習する場合の学習項目の選定や各語法に対応する現代語訳（訳法）の検討などを行ってきた。本稿ではこれらに続いて、助詞の学習について考える。

助詞は語形変化しないので辞書で調べやすいという利点はある。しかし、例えば「行かば」と「行けば」の違いなど、辞書を引くだけでは直ちに正確な現代語訳にはたどり着きにくい場合も往々にしてある。頻出するもので現代語と異なる語形や意味のものについては、情報を整理された形で学習者に伝え、学習の便を図ることも必要だろう。

学習内容を考えるにあたって指針とするのは、これまで同様次の 2 点である。

1. 古文の精読ではなく、大略をつかめるようにすることを目標とする。
2. 学習者の負担をできるだけ少なくする。

つまり、学習項目を可能な限り少なくし、かつ内容の簡便なものを目指す。学習者が自学に近い形で学習できることが理想である。

そのために、引き続き国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を用いて用例数や前接・後接語句を調べ、学習項目の選定等の判断材料としたい。「日本語歴史コーパス」では、本稿を執筆している 2015 年 5 月時点で「平安時代編」「室町時代編 I 狂言」が公開されているが、本稿では「平安時代編」のみを扱う。深澤（2013）以降、「文語文法」として扱ってきたのはいわゆる学校文法のものであり、それらが大きく依拠しているのは平安時代語だからである。以下、「日本語歴史コーパス 平安時代編」を「コーパス」と称す。

本稿での助詞の下位分類は学校文法に従って、格助詞・接続助詞・係助詞・副助

詞・終助詞・間投助詞とする。表１はコーパスでの各助詞の延べ語数を示したものだが、示されているように、コーパスでの分類は学校文法のものとはいささか異なる。相違点については必要に応じて触れることとする。

表１

格助詞	104415
係助詞	50863
接続助詞	48286
副助詞	11988
終助詞	3365
準体助詞	141
合計	219058

２．格助詞

学校文法（文語文法）で格助詞とされるのは、次の 10 語である。「して」以外は現代語でも同じ語形が用いられている。

の、が、を、に、へ、にて、して、と、より、から

「して」は、手許の学習用古語辞典[1]では次のように説明されている。

①使役の対象をしめす。…を使って。…に命じて。例「楫取りして、幣をたいまつらするに、幣の東へ散れば」（中略）②行為の方法・手段、材料を表す。…で。…でもって。…を用いて。例「ただ、その奥に、炭櫃に消え炭のあるして、『草の庵を誰かたづねむ』と書きつけて、（中略）③同じ動作をする人の人数や範囲を表す。共同者を示す。…で。…とともに。例「二人して結びしひもをひとりしてわれは解き見じ（後略）

一方、「して」以外のもの、つまり現代語と語形が同じものは、それぞれの用法も現代語とほぼ変わらない[2]。よって、格助詞に関しては、「して」を除けば基本的に新たに学習させることがらはないと考えられる。

検討が必要なのは「して」についてのみである。格助詞が 10 語であって他の語は現代語と同じであることを考えると、「して」を学習項目として取り上げることに問題はなさそうにも思われる。しかし、助詞全体の学習を考えるならば、さらに、動詞や助動詞の学習でどうしても避けられないある程度の負担（例えば、深澤（2014a）で提案したような語形変化表や訳法を覚えること）を考えるならば、「して」を学習項目から外すことのメリットも見えてくる。「して」を優先的な学習項目からはずし、格助詞の最低限の知識としては現代語の知識があれば十分だとすれば、学習者の心理的な負担の軽減につながると考えられるからである。

そこで、コーパスでそれぞれの格助詞がどの程度用いられているのか見ておきたい。表２は、コーパスで「格助詞」と分類されている語[3]を使用数の多い順に並べ

たものである[4]。表の「学校文法」欄は、次のことを示している。

○：先に挙げた学校文法（文語文法）の 10 語

△：しばしば「奈良時代の助詞」として学校文法で扱われる語[5]

×：上記 2 項のいずれにも該当しない語

表２を見ると、先に問題とした「して」の語数が 0 となっている。これは、コーパスでは格助詞「して」にあたる部分を、〈動詞「す」連用形「し」＋接続助詞「て」〉としているからである。

表２

コーパス	学校文法	用例数
の	○	38270
に	○	24264
と	○	18016
を	○	14727
より	○	2402
とて	×	2390
が	○	2278
にて	○	772
をば	×	501
へ	○	336
から	○	283
つ	△	176
して	○	0
ゆ	△	0
ゆり	△	0
よ	△	0
合計		104415

そこで、コーパスで〈動詞「し」＋助詞「て」〉の組み合わせになっていると思われる部分を抽出すると[6]、1374 例が該当した。ここには、次の 3 つのパターンが含まれる。

1. 動詞「す」連用形「し」＋「て」（例：やまとうたは人の心を種として）
2. 格助詞「して」
3. 接続助詞「して」（例：春の花匂ひすくなくして）

例を見る限り、いずれかのパターンに極端に偏っていることはなさそうである。そうすると、格助詞「して」の例は、表２の他の格助詞に比べても使用数は少ない方であることになる。学習項目からは外し、学習者が使用法の分からない「して」に出会った場合は辞書にまかせることにしても、問題はないように思われる。

最後に、コーパスでは格助詞とされている「とて」「をば」について一言付け加えておきたい。

本稿では学校文法との連続性を念頭に置いているので、コーパスに従ってこれらを格助詞として学習項目にすることは考えていない。ただ、表２にしめされた「とて」の使用数のある程度の多さには注意を払っておいてよいと考える。学習者の理解状況によっては、

～とて　→　～と言って／～と思って

のような訳法を提示した方がよい場合もあるかもしれない。

3．接続助詞

3．1．学習項目の選定

学校文法（文語文法）で接続助詞とされる 17 語について、現代語との対応から次のように分けた上で学習項目の選定を行いたい。

a. 現代語に同じ語形がある

a1. 用法も現代語と同じ …… て、が、つつ、ながら、ものの、ものを

a2. 用法は現代語と異なる … と、ば、に、を、で

b. 現代語に同じ語形がない …… とも、ど、ども、ものから、ものゆゑ

a2 について少し補足しておく。

文語文法で逆接の接続助詞として扱われる「と」と同じ語形の接続助詞「と」が現代語にもある。現代語の「と」は、「そこを曲がると駅があります」のように順接の働きを持つ。『日本語文法大辞典』によれば、こうした「と」が現れるのは室町時代以降であるという[7]。

「ば」は、現代語でも古語でも順接の条件を表すが、古語の場合は「ば」の直前の語の活用形により、仮定条件や確定条件などになる点が現代語と異なる。

「に」「を」「で」は、現代語には接続助詞では同形のものはないが、格助詞で同形のものがあることを考慮に入れて、b ではなく a2 に分類した。

さて、本稿の目的に照らして学習項目となり得るのは a2 と b である。これらのうち、使用数の多いものは学習項目として学習者に訳法を提示する必要がある。

そこで、コーパスでの使用数を見てみたい。表３は、コーパスで接続助詞と分類されている語[8]の延べ語数である。「学校文法」欄の○は学校文法で接続助詞と分類されることを、×はそうではないことを示す。また、上述の分類も併せて示した。

まず、表３で 0 例となっているものについて確認しておきたい。仮に、学校文法での分類基準で見た場合に多くの使用例が認められることになれば、学習項目に入れる必要が生じるからである。

接続助詞の「が」は格助詞「が」から派生したとされるが、その時期は平安時代末期以降と考えられている。今回用いているコーパスが平安時代の文献をベースにしていることから、接続助詞の「が」を 0 例としていると考えられる。もっとも、接続助詞「が」の用法は現代語と同じなので、いずれにせよ学習項目に入れる必要はない。

表 3

接続助詞	学校文法	分類	用例数
て	○	a1	26251
ば	○	a2	10492
に	○	a2	3713
ど	○	b	3556
で	○	a2	1196
つつ	○	a1	1181
ながら	○	a1	659
とも	○	b	586
を	○	a2	346
ども	○	b	295
も	×	-	11
が	○	a1	0
して	○	b	0
と	○	a2	0
ものから	○	b	0
ものの	○	a1	0
ものゆゑ	○	b	0
ものを	○	a1	0
合計			48286

「して」については、前節でも述べたようにコーパスでは〈動詞「す」連用形「し」＋接続助詞「て」〉と分類される。これも格助詞「して」の場合と同様、使用数を多く見積もっても 1000 例に到底満たないと考えられるため、学習項目からは除外する。

「と」は先にも触れたとおり文語文法では逆接の条件を表す接続助詞とされ、次のような例が該当する。現代語訳を併せて示す[9]。

暮ると明くと目かれぬものを梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

（古今和歌集巻第一）

日が暮れても、夜が明けても、絶えず目を離さなかったのに、その梅の花が、ちょっと油断をしていたら、人のいない間にいつ散ってしまったのだろう。

これらは、コーパスでは格助詞に分類されている。つまり、学校文法では接続助詞と判断されるようなものが、表 2 に示した格助詞 18016 例に含まれていることになる。しかし、「平安時代から使われ出した「逆接の仮定条件」を示すものは、「とも」に比して実際には文献に見られる例は少ない」（『日本語文法大辞典』「と〔接続助詞〕」項補説、糸井通浩執筆）ことを考えると、学習項目に入れなければならないほどの使用例があるとは思えない。

逆接の条件を表すとされる「ものの」「ものを」「ものから」「ものゆゑ」は、コーパスでは名詞「もの」に格助詞（ものの、ものから）、接続助詞（ものを）、名

詞（ものゆゑ）が接続したものとされている。「ものの」「ものを」は現代語でもほぼ同様に用いることから、使用数にかかわらず学習項目からは除外する。「ものから」「ものゆゑ」は、コーパスの文字列検索で調べると、それぞれ 180 例と 10 例が挙がる。いずれも他の接続助詞の使用数から見るとわずかな用例数であり、学習項目に入れる必要はないと考えられる。

以上を踏まえて、表３から学習項目を改めて選定するならば、「ば」「に」「ど」の３語が挙げられる。最も多用される「て」とこれら３語の使用数を合わせると、全体の９割を超える。最優先すべき学習項目としては「ど」までで十分だと思われる[10]。

これらは前稿までで示した、助動詞・動詞・形容詞の訳法に付随する形で現代語訳を示してきた助詞でもある。よって、以下での検討は、前稿までの内容に修正・補足・整理を加えることが主となる。

３．２．学習項目とした語の訳法についての検討

３．２．１．「ば」

接続助詞「ば」は、未然形を承けるか已然形を承けるかで意味が大きく変わるところが、しばしば文語文法学習での要点とされる。

〔未然形＋ば〕限りと思はば、かくわりなきもの疑ひはせよ。　（源氏物語・帚木）[11]
（これきりで別れるつもりなら、こういう聞き分けのない邪推もするがいい。）

〔已然形＋ば〕わが姉妹の姫君は、この定めにかなひたまへりと思へば、君のうちねぶりて言葉まぜたまはぬを、さうざうしく心やましと思ふ。　（源氏物語・帚木）
（自分の妹の姫君は、この議論にぴったりでいらっしゃると思うので、源氏の君が居眠りをして言葉をさしはさまれないのを、物足りなくもいまいましくも思っている。）

接続助詞「ば」を含む文節についてはこれまでも検討し、訳法等を提案してきた。動詞の学習について考えた深澤（2014a）では、正格活用動詞の場合の訳法を、

形容詞已然形に「ば」が接続した場合については、深澤（2014b）で訳法を提示した[12]。なお、これらでは、〈已然形＋ば〉の訳法として原因を表す「ので」を用いたが、契機などを表す「と」といずれを訳法として用いるべきかは検討課題としていた[13]。また、助動詞に「ば」が接続した場合については、深澤（2013）の助動詞語形変化表に現代語訳の例を組み込んでいるものがある。

基本的にはこれらを整理・統合する形で「〜ば」の訳法を示すことになる。ただし、次の点については新たに検討しなければならない。

1. 〈已然形＋ば〉に対応させる現代語訳は「ので」「と」のいずれが適切か。
2. 変格活用動詞に訳法を提示すべき語があるか。
3. 〈助動詞＋ば〉のうち、訳法に加えるべき語はどれか。

1 から順に検討していこう。

順接の確定条件を表す〈已然形＋ば〉は、いくつかの現代語訳が対応する。例えば、『日本語文法大辞典』「ば」項では、意義説明とともに対応する現代語が列挙される。代表的意味である「順接の確定条件」の項を挙げると次のようである。

(b) 順接の確定条件を示す。

(ア) 前件の人の動作（認知行為など）が機縁となって、後件の事態・状態の存在に気づいたり発見したりしたことを示す。「…すると」「…したところ」の意。

(イ) 前件の動作・事態が契機となって、後件の動作・事態がすぐ続いて起こることを示す。事態・事柄の継起的な先後関係を示す。「…したところ」「…すると（すぐに）」の意。

(ウ) 前件の事態・状態が、後件の事態・状態の原因・理由であることを示す。必然的な関係にあることを示す。「…から」「…ので」の意。

(エ) 前件の事態・状態が起こると常に後件の事態・状態が起こることを示す。恒常条件（一般条件とも）を示す。一般的な原理・慣習・傾向などを述べるときに用いられる。「…と（いつも）」「…と（必ず）」の意。

現代語のパターンとしては、「〜と」か「〜ので」の 2 つに大別できそうである。

いずれを訳法に盛り込むべきかを判断するために、コーパスに含まれる「思へば」130 例について『新編日本古典文学全集』の現代語訳を確認した。その結果、

「～と」あるいは「～と」にあたる現代語が当てられている例が64例、「～ので」あるいは「～ので」にあたる現代語が当てられている例が64例、「～のに」が当てられている例が2例あった。つまり、〈已然形＋ば〉の訳としては「～と」も「～ので」も同程度の出現率である可能性が高く、いずれか一方を訳法から外すことは適切ではない。

よって、前稿までで〈已然形＋ば〉の現代語訳・訳法として挙げたものには「～と」を加える必要がある。深澤（2014a）㉒を(1)のように、深澤（2014b）㉘を(2)のように修正したい[14]。

(1)　①－ e ば（四段）→　－ u ので／―― u と

②－ ire ば（上一段）→　－ iru ので／－ iru と

③－ ure ば（上二段、下二段）→ { －iru ので／－ iru と ／ －eru ので／－ eru と }

（例）①おもへば　→　おもうので／おもうと

②みれば　→　みるので／みると

②すぐれば／みゆれば　→ { すぎるので／すぎると ／ みえるので／みえると }

(2)　語幹－けれ－ば　→　〈辞書形〉－ので／〈辞書形〉－と

（例）なければ　→　ないので／ないと

いみじければ　→　はなはだしいので／はなはだしいと

次に2について検討する。

深澤（2014a）では、所属語数の多い正格活用動詞（下一段動詞「蹴る」を除く）を典型例として訳法に用いた。しかし、単語ごとに使用数を見ていくと、サ変動詞「す」やラ変動詞「あり」など、正格活用所属語と同程度以上に用いられている語もある[15]。これらの語の訳法を示すべきか検討する必要があるのである。

表4

	未然形		已然形	
	総数	「ば」後続	総数	「ば」後続
カ変	235	5	45	30
サ変	1796	18	293	180
ナ変	65	14	8	8
ラ変	3632	322	1056	491
思ふ	353	13	294	130

表4は、変格活用動詞の未然形及び已然形の使用数、それらのうち「ば」が

後続する例の数をまとめたものである。比較対象として、深澤（2014a）で四段動詞の代表語とした「思ふ」の使用数を挙げる。

「思はば」「思へば」と同程度、あるいはそれ以上の使用例を持つのはサ変、ナ変未然形、ラ変である。ただ、サ変未然形 18 例とナ変未然形 14 例は、学習項目に入れるにはあまりに少数である。サ変已然形とラ変未然形・已然形を訳法に加えるにとどめたい。それぞれの代表語として、最も使用例の多い「す」「あり」[16] を用いて訳法を示すと次のようになる。

(3) あらば（ラ変） → 〈条件形〉

(4) すれば（サ変） → すると／するので
　　あれば（ラ変） → あると／あるので

最後に 3 について検討する。

表 5 は、助動詞[17] の未然形と已然形の使用数と、それぞれに「ば」が後続した例の使用数とをまとめたものである。

表 5

	未然形		已然形	
	総数	「ば」後続	総数	「ば」後続
なり	1482	126	1569	884
ず	293	5	819	414
む	—	—	468	0
べし	84	0	227	82
たり	443	50	747	576
けり	—	—	1709	1190
ぬ	875	109	355	296
り	105	7	403	314
き	27	27	762	358
つ	305	15	294	126

未然形は、そのほとんどが 100 例に満たない。100 例を超えるのは、「なり（ならば）」と「ぬ（なば）」だが、「ならば」は、現代語と語形・用法が同じになるため学習項目とする必要はない。残るは「なば」だが、学習項目をできるだけ繁雑にしないことを目指すならば、「なば」もひとまず除外しておきたい。

一方、已然形および〈已然形＋ば〉は未然形の場合に比べて使用例が多い。そのうち 100 例に満たない「む」「べし（べければ）」を除いたものは学習項目としてあげてもよいと思われる。これらは、深澤（2013）で挙げた助動詞の語形変化表にすでに現代語訳例を組み入れているものである。

以上を踏まえて、「ば」の訳法を導き出せるように本稿までの情報をまとめると次のようになる。

(5)〈条件形〉に訳す「ば」

正格活用動詞の場合　→　深澤（2014a）(22)

変格活用動詞の場合　→　本稿(3)

(6)「～ので／～と」と訳す「ば」

正格活用動詞の場合　→　本稿(1)

変格活用動詞の場合　→　本稿(4)

形容詞の場合　→　本稿(2)

助動詞の場合　→　深澤（2013）語形変化表の該当欄

テキスト等を作成する場合など実際に運用する段階では、これらの情報の提示方法については調整の必要がある。「心憂くおぼゆれば」について訳法を調べたい場合に、「おぼゆれ」に着目しても「ば」に着目しても(1)にたどり着けるようにしておかなければならない。

3.2.2.「に」

接続助詞「に」の大きな特徴は、順接の条件も逆接の条件も表せることである。順接と逆接のいずれになるかは文脈によるが、現代語訳する場合は、それぞれに対応して異なるパターンの現代語があてられる。順接の場合は「～と」または「～ので」、逆接の場合は「～のに」で表されることが多い。

深澤（2014a）では、正格活用動詞に接続助詞「に」または格助詞「に」が接続する場合を代表として訳法を示した。接続助詞「に」の現代語訳としては順接「～と」のみをあてている。しかし、深澤（2014b）で形容詞連体形に接続助詞「に」が接続する場合については、『新編日本古典文学全集』での訳例を踏まえて逆接「～のに」を訳法に入れた。

多様な現代語に対応するところに接続助詞「に」の大きな特徴があることを考えると、いずれかに訳法を統一してしまうのは躊躇される。やや繁雑になっても、現代語訳のバリエーションをそのまま示しておく方が適切なのではないか。

そこで、本稿では動詞については順接と逆接の場合（に加えて格助詞の場合）を両方訳法に入れることにしたい。深澤（2014a）(23)を(7)のように、深澤（2014b）(20)を(8)のように修正しておく。

(7) ①－uに（四段） → －uと／－uので／－uのに／－uときに

②－iruに（上一段） → －iruと／－iruので／－iruのに／－iruときに

③－uruに（上二段、下二段） → －iruと／－iruので／－iruのに／－iruときに
－eruと／－eruので／－eruのに／－eruときに

（例）①おもふに → おもうと／おもうので／おもうのに／おもうときに

②みるに → みると／みるので／みるのに／みるときに

③すぐるに／みゆるに → すぎると／すぎるので／すぎるのに／すぎるときに
みえると／みえるので／みえるのに／みえるときに

(8) 語幹－き－に

→〈辞書形〉－のに／〈辞書形〉－と／〈辞書形〉－ので／〈辞書形〉－ときに

（例）なきに → ないのに／ないと／ないので／ないときに

おほきに → おおいのに／おおいと／おおいので／おおいときに

いみじきに → はなはだしいのに／はなはだしいと／
はなはだしいので／はなはだしいときに

をかしきに → おかしいのに／おかしいと／
おかしいので／おかしいときに

変格活用動詞および助動詞を訳法にどの程度加えるか見るために、〈連体形＋に〉の使用数をまとめたのが表6と表7である。ただし、ここでの「に」には接続助詞だけではなく格助詞も含まれている。変格活用動詞については、〈サ変連体形＋「に」〉と〈ラ変連体形＋「に」〉について、代表語「す」「あり」での訳法を挙げておけば十分である。(9)に訳法を挙げる。また、助動詞については、〈「つ」連体形＋「に」〉（「つるに」）以外は挙げておいたほうがよいだろう。いずれも前稿までで現代語訳を挙げたものになる。修正点は(7)～(9)に準ずる。

表6

	連体形	
	総数	「に」後続
カ変	183	19
サ変	976	175
ナ変	40	1
ラ変	4960	237
思ふ	1160	307

表7

	連体形	
	総例	「に」後続
なり	4588	266
ず	3730	223
む	4944	315
べし	2833	258
たり	4592	478
けり	4282	278
ぬ	669	58
り	2799	249
き	3927	302
つ	1125	84

(9)　するに　→　すると／するので／するのに／するときに

あるに　→　あると／あるので／あるのに／あるときに

以上を踏まえて、助詞「に」が接続する場合の訳法について情報を整理すると(10)のようになる。

(10)　「〜に」の訳法

正格活用動詞　→　本稿(7)

変格活用動詞　→　本稿(9)

形容詞　→　本稿(8)

助動詞　→　深澤（2013）語形変化表の該当欄

3.2.3.「ど」

接続助詞「ど」についても、前稿まででたびたび訳法に取り上げてきた。「ど」に対応させる現代語は「けれども」で統一でき、再検討の必要はない。

「ば」「に」のときと同様、変格活用動詞あるいは助動詞に「ど」が後続する例の数に基づき、どれを訳法に加えるか検討したい。表８は変格活用動詞の場合、表９は助動詞の場合をまとめたものである。表８に従えば、変格活用動詞については〈ラ変已然形＋「ど」〉のみ挙げれば十分だろう。代表語「あり」で訳法を示す。

表８

	已然形	
	総数	「ど」後続
カ変	45	5
サ変	293	58
ナ変	8	0
ラ変	1056	329
思ふ	294	120

表９

	已然形	
	総数	「ど」後続
なり	1569	439
ず	819	303
む	468	8
べし	227	82
たり	747	134
けり	1709	195
ぬ	355	41
り	403	71
き	762	207
つ	294	59

(11)　あれど（ラ変）　→　あるけれども

助動詞については比較的使用数の認められる「なり」「ず」「たり」「けり」「き」の場合を挙げればよいと思われる。これらは深澤（2013）ですでに現代語訳を示している。

以上を踏まえて接続助詞「ど」が後続する場合の訳法について前稿までの情報をまとめたのが(12)である。

⑿ 「～ど」の訳し方

正格活用動詞 → 深澤（2014a）⑵⑼

変格活用動詞 → 本稿⑾

形容詞 → 深澤（2014b）⑵⑹

助動詞 → 深澤（2013）語形変化表の該当欄

4．おわりに

本稿では、格助詞と接続助詞の学習項目を選定し、前稿までの情報を修正・補足・整理する形でそれぞれの訳法を示した。次稿では、残る助詞に触れつつ、本稿までで提示した訳法が古文読解にどの程度有効かの検討を行いたい。

参考文献

深澤愛（2013）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える(1)―文語助動詞の場合―」『文学・芸術・文化』25-1、近畿大学文芸学部、pp.128(75) － 114(89)

深澤愛（2014a）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える(2)―文語動詞の場合―」『文学・芸術・文化』25-2、近畿大学文芸学部、pp.92(143) － 77(158)

深澤愛（2014b）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える(3)―文語形容詞の場合―」『文学・芸術・文化』26-1、近畿大学文芸学部、pp.52(141) － 39(154)

山口明穂・秋本宇英編（2001）『日本語文法大辞典』明治書院

注

1 『三省堂全訳読解古語辞典』1997 年、三省堂。

2 もちろん、細かく見れば現代語にはない用法も存在する。例えば、「より」には「徒歩より詣でけり」のような「手段を表す」などと説明される用法もあるにはある。しかし、このように現代語にないものがその格助詞のメインの用法となっていることはなく、それゆえ使用例もメインの用法に比べれば相当に少ないと思われる。1 節に掲げた指針に従えば、こうした用法は学習項目として取り上げる積極的理由がない。

3 短単位検索で、品詞の中分類が「助詞－格助詞」の語。

4 学校文法の考え方に従えば、格助詞「の」には、表２に挙げたものの他、表１で「準体

助詞」とされているものが加わる。「準体助詞」141 例は全て「の」になるが、これらは学校文法では格助詞「の」の用法の 1 つとして分類されている。

[5] 学校文法で扱う助詞の範囲を念頭においてこれらの語（つ、ゆ、ゆり、よ）を表に一応含めておくが、コーパスが「平安時代編」である以上、0 例が続出するのは当然のことではある。

[6] 以下の手順で抽出した。①文字列検索で「して」を含む例を抽出。②①から、「し」がサ変動詞「す」の連用形ではないもの（「思しして」など）を除外。

[7] 「と」については、次のようにも述べられている。

これ〔順接の条件を表す「と」―引用者注〕は、それまでの仮定逆接を表す用法から派生したものと考えるよりも、この時代になって新たに、格助詞「と」から転成したと見るべきであろうと考えられている。（「と〔接続助詞〕」項「成立・語誌」欄）

[8] 短単位検索で、品詞の中分類が「助詞―接続助詞」の語。

[9] 原文、現代語訳ともに『新編日本古典文学全集』第 11 巻「古今和歌集」から引用した。コーパスの底本となっているためである。

[10] 学習項目をいささか増やすことにはなるが、「で」も入れてもいいかもしれない。他に比べて使用例が特別多いわけではないが、「起きもせで」を「起きもしないで」というように、知識がなければ現代語を導くのはやや困難ではないかと思われるからである。

[11] 原文、現代語訳ともに『新編古典文学全集』第 20 巻「源氏物語 1」から引用した。

[12] 未然形に接続した例はなかったため（深澤（2014b）執筆以降、「日本語歴史コーパス」に修正等が施されているため改めて確認したが、未然形 1107 例のうち「ば」が接続する例はなかった）、訳法にも挙げていない。また、シク活用已然形の補助活用形（「多かれ」）も使用数が少ないため学習項目に立てていない。

[13] 深澤（2014a）注 15。

[14] 深澤（2013）で提示した助動詞の語形変化表の現代語訳欄も、これに準じて修正が必要である。本稿では紙幅の都合もあるので修正後の語形変化表の提示は省く。

[15] 深澤（2014a）p.91(144)に活用の種類ごとに使用数の多い語を挙げたが、「す」4040 例や「あり」5468 例は、上一段動詞・下二段動詞で最多の「見る」2602 例・「聞こゆ」3036 例、後で比較対象とする四段動詞「思ふ」3395 例よりも使用数が多い。

[16] 「す」…サ変動詞 3032 例中 2548 例。「あり」…ラ変動詞 1796 例中 1413 例。

[17] 深澤（2013）で学習項目として選定したものに限る。